

高尚な精神を育てる教育

津守 眞

二 元氣さと悲しみとが同居する子どもの日常

幼児が大人との生活の中で、急に一人前と感じられる時がある。大人と会話し、かけひきして自分の目的を達しようとするときなど、小さな大人に思えて、ついこの間まで無垢な赤ん坊だったのにと寂しさをすら感じる。二〇〇四年一月号「赤ん坊讃歌」に記した小さな幼児は、そんな年齢になった。ペロペロキャンデー（棒つき飴）

が欲しくて、母親の傍らでぐずぐず言って交渉して、とうとう買ってもらった。それを手に持って私の家に来るなり、新聞紙を丸めて長い棒を作った。もつと長くしたい。大人が手伝って天井まで届かせた。嵐の後、西の空に射した夕陽の光に、声をあげて上を見たその子である。私共は生まれて間もない赤ん坊の中に生涯にわたってつづく上を見上げる高い精神が備わっているのを見て感動したのだった。成長とともにそれはどこにい

くのか。

四歳になったその子は新聞紙の長い棒を振り回してパンパン、パンパンと大声を出した。銃だという。その声も戦いごっこで、赤ん坊とは違った精悍な顔つきに見えた。前日に友達の家遊びに行き、その遊びをすること友達の仲間に加わった証のようであった。銃という言葉を使っても、子どもは人を殺す武器だと思っていない。元氣一杯のエネルギーを人に向け、大きな声を出す。その元氣さがあつてこそその子どもである。そうわかつていても私の心には引つかかるものが残った。現代の子どもたちはテレビやビデオでそういう光景を見なれている。

四歳の子どもはひとしきり棒を振り回すと、庭で水を流した。二、三歳の頃から幼児の好む遊びである。水は流れるうちに思わぬところに水路をつくり、水たまりができる。手が水に濡れる感触、水が飛び散る光景、水が落ちる音、水が提供してくれる面白さは多岐である。その面白さを、相当の時間満喫した後、子どもは堤防をつ

くって水を塞ぎ止め、水路をつくり、

土手の土が崩れると土をのけ、流れの通りをよくし、流れの向きを変えるなど、目的意識をもって手を使って遊んだ。こうなると時間の過ぎるのも知らず、大人の助けも借りずに遊びに没頭

する。つい先頃まで見られなかったやり方である。昼食のパンを食べながら、そのパンをちぎり、プディングをつくると言つて牛乳を入れ、母親に手伝ってもらつてオープンに入れて焼いた。やり終えたとき、友達の二歳の女の子が、今日は風邪を引いて来られなくなつたと電話があり、泣いた。活発に遊んでいるときの怒る泣き方ではなくて、さめざめと泣いた。そこまで見たとき、この日は朝からこの女の子が来るのをどんなに楽しみにしていたかが私共にわかつた。オープンでプディングを焼いたのも、この子に食べさせたいと思つていたからだつた。私は幼児の心の優しさと、友達の力の大きさを感じさせられた。



保育の前・最中・後

保育の実践で毎回考えることがある。保育の「前」

と、「最中」と、保育の「後」とである。一日が始まる前には、何が起きるかわからない。不安と期待と緊張がある。その時に考えることは、毎日繰り返し朝の祈りである。何があっても受け止められるように心の備えをする時である。保育の最中は、目の前の子どもの様子をよく見ることに一生懸命で、考えるというよりも、そのときに自分が何をすることが必要かをとっさに判断して行動する。座って考えるわけではないが、行動に伴う思考である。そして保育が終わってから一歩退いて省察する。今日の保育の全体が省察の対象になる。「最中」は相手がその思いを遂げるようにと考えるから瞬時の緊張を伴う。「後」は過去、現在、未来にわたって頭の中で自由に行き来しながら考える。

新聞紙を丸めた長い棒に戻ろう。

幼児が銃と言って棒を振り回してバンバンと大声を出

したとき、私は快く思わなかった。

戦争玩具

私共の国では、第二次世界大戦直後、玩具の銃や刀を子どもに持たせない時期があった。いまでは考えられないことであるが、それが社会の風潮だった。私は出征する前に父が揃えてくれた日本刀を、錦の袋ごと進駐軍に引き渡した。青年の私が自分の日本刀を手にした時の高揚した気持ちは忘れないが、私も父もそれを手放すことを屈辱とは感じなかった。その代わり、二度とそれを使うことはないという、長い間心の底で望んでいた平和国家を手に入れたのだから。

それからずっと経ってからも、戦争玩具は子どもにも与えないという時期が続いた。私が保育の実践の場の責任をもつようになったとき、よそから頂いた玩具の中にピストルや刀があった。私はそれらを取り出して屑籠に捨てた。それを見ていた大人たちの中に議論が生じた。ピストルや刀を持たないと大声が出せない子もいる、子ど

もには元気がだいじなのだから、元気を誘う玩具は必要ではないかと。時には激しい行動になるくらい憤慨したり、怒ったりすることがなかったら現実の社会に生きる人間とはならないだろう。それでもなお刀やピストルの玩具を保育室におくことに私は納得しかねた。

ちょうどそのころ、一九八五年、ユネスコ出版物マドレーヌ・グタール著『平和の種子を育てよう―幼児期からの国際理解と平和教育―』を荘司雅子先生の監修で、私共 O M E P（世界幼児保育・教育機構）日本委員会が翻訳した。その中に、スウェーデン政府は一九七八年の一月八日から戦争玩具の販売を禁じたこと、一九八二年九月十三日に、欧州議会は、45対82の賛成（12の棄権）で、欧州共同体の国々で、武器で遊ぶことを法的に禁止することを決定したことが記されていた。そして、日本製の精巧な戦争玩具が輸出されていることが特記されていた。

そのときからほぼ二十年を経、イラク戦争が起こり、世界は急激に変化した。戦争玩具どころではない、大人

の戦争が世界中に蔓延激化している。そればかりか、日本国憲法は世界の希望だったのに、日本人自らの手で変えられようとしている。戦争玩具を子どもに与えない、使わせないというほどの大人の気概があつたら、日本の社会はもつと違う進展をしていたらう。

生まれたばかりの赤ん坊の、高みから射す光への感動は、天井にまで届く銃への憧れに置き換えられてしまうのか。そうではないことは明らかである。次の瞬間には子どもは高い樹木の上に残った紅葉を取ろうと新聞紙の長い棒を上には伸ばした。パンパンと叫んで長い銃にする子どもの心には高みの光へと向かう心がある。それを高尚な精神へと育てるのが教育の力であらう。そこから本式の教育が始まる。

小学校の学芸会で

このことを考えていた時、私は小学校五年生の男子の孫からぜひ見に来てくれと言われ小学校の学芸会に行つた。八郎潟にまつわる昔話を音楽劇にした作品で、大水

から村人を救うために八郎が犠牲になるという筋だった。数人ずつのグループでそれぞれのパートの台詞とナレーションを受け持ち、歌の伴奏もすべて児童たちによつて上演された。すべての台詞を全員が暗唱したのだという。その子は単独で出演するのではないのに是非に私を招いてくれたのだった。練習の期間数週間、きょうだいたちからうるさいと言われるので押し入れの中で大声で暗唱していたのだという。それだけのことがあつて、出来上りの全体も見事で、参観の大人たちの感動を誘つた。私は三十数人の子どもたちに自主的に（と子どもたちは思った）任せた担任の先生の苦心を察した。日本の伝承文学の中にある普遍的な高尚の精神がここにもある。

小学生の子どもをもつ友人にこの話をしたところ、どの人も自分の子どもと先生と学校について、同じ様な体験をしていた。そして、いまの学校教育に希望をもつていた。こまかく言えばいろいろ不満はあるけどねと付け加えた。

高尚な精神の教育

「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かつて剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう」イザヤ書の言葉である。二千八百年前のイスラエルで、若者も老人も、女も男も心に抱いた幻であり、理想である。ここで行われる「主の光」を心に抱きつつアウシュヴィッツの強制収容所にユダヤ人たちが送られていったのは、われわれの記憶に新しい。わずか六十年前の同じイスラエルである。戦争に敗れた時に日本人はこの幻が実現したと思つた。しかし現代の日本もイスラエルも、社会の状況はこの理想からほど遠い。

世界のこの現状にもかかわらず、赤ん坊が高みの光へと向ける目、それを感動をもつて見る大人の目の中に高尚な精神を育てる土壌がある。どのようにそれは後の時期に引き継がれてゆくのか。紆余曲折があるうが、もう暫く追求したい。

（保育研究者）